

## 森下ゼミナール活動月報《 8 月 》

### 【目次】

- ・はじめに
- ・夏季視察会に参加して
- ・豊田調査に参加して
- ・豊田調査及び近況のご報告
- ・編集長より

### 【はじめに】

こんにちは、26期生の木村拓郎です。盛夏を過ぎたとはいえ、厳しい残暑が続きますが、皆様におかれましては益々のご健勝のこととお慶び申し上げます。8月期は、8月2日に行った夏季視察会と、8月25、26日に愛知県豊田市にて行った豊田調査についてご報告いたします。また最後には、同じく豊田調査に参加されたOBで東海学園大学経営学部の助教である中川先生より、豊田調査及び近況について寄稿していただきましたので、合わせてご報告させていただきます。

### 【夏季視察調査会に参加して】

夏季視察会では、12班に分かれて東京都近郊を対象に調査しました。筆者は大宮地域を担当し、大宮盆栽村・さいたま市立大宮盆栽美術館、埼玉県立歴史と民族の博物館、武蔵一宮氷川神社、造幣さいたま博物館等を視察して参りました。今回は、大宮盆栽村・盆栽美術館の概要と、座敷飾りから窺い知ることができる日本人のおもてなしの心についてご紹介します。

初めに、大宮盆栽村（以下、「当村」とする）とさいたま市立大宮盆栽美術館（以下、「当美術館」とする）についてです。当村は、1923（大正12）年に起きた関東大震災によって、東京の盆栽業者が盆栽育成に適した土地を求めて移り住んだことから開村されました。名品盆栽の聖地として今でも知られており、落ち着いたある景観となっています。当美術館は、盆栽文化の調査、研究を行うと共に、盆栽の魅力の世界に発信し、多くの人に楽しんでもらうことを目的として2010（平成22）年に開館された、世界初の公立盆栽美術館であります。海外観光客でも楽しめるように、毎週月曜日には当館ボランティアによる英語ガイドも実施しています。盆栽は、英語でも「BONSAI」と呼ばれ、日本を代表する伝統的な文化芸術の1つです。館内には、コレクションギャラリー、盆栽庭園、ミュージアムショップ、撮影エリア、企画展示室などのコーナーがあ

り、学生は 150 円、一般は 310 円と手頃な価格で楽しむことができます。

次に、座敷飾りについてです。座敷飾りとは、盆栽や陶器等の作品を飾る書院造の部屋の形式のことを言い、「真・行・草」という中国書道に由来する 3 つの格の異なる形式から成ります。元々、三具足（花立て・香炉・燭台の 3 つの仏具）を置くための押板（「床の間」の床）の設置から始まり、徐々に棚などが設けられ座敷飾りという形式ができあがっていきました。下の写真は「真の間」であり、最も格式の高い高級な座敷です。床柱は「柾目の杉」となっており、1 本の杉から線が真っすぐ入っているものはほんの少ししか採ることができないことから、柾目の杉を用いている座敷を持つことは、成功者の証とされています。「行の間」は、真の間と草の間の中間を担い、近代以降に造られたほとんどの座敷は「行」の様式をとっています。「草の間」は、主に茶席として使用されている座敷です。

座敷飾りが由来である古くからの言葉に、「床を背にして」という文句があります。この言葉は、「招かれた客の美」をつくり出し、人を輝かせ、盛り立てる役割が床にはある、という意味を持ちます。床の間は一般的に、入口から離れた場所にある掛け軸や生け花などが飾られる空間のことを言います。この空間は使用目的に合わせて造られ、武士なら刀、芸術家なら盆栽や陶器などを飾り、それらにより一層の彩りを持たせる役割を果たしています。そこには日本人芸術家のおもてなしの心が盛り込まれており、人を魅了させる空間が造られています。日常的な生活様式として「日本人のおもてなしの心」を表現する場となった過程を窺い知ることができました。

今回の視察会では、先輩方から、地域を視察するに於いての視点・着目点を新たに学ぶことができました。視察調査では現場にしかない資料や物を収集することが目的の 1 つではありますが、その分、周りの人が得ているのと同じ情報を得ることが多くなってしまったため、独自の視点を大切にしたい、と思えた視察会となりました。



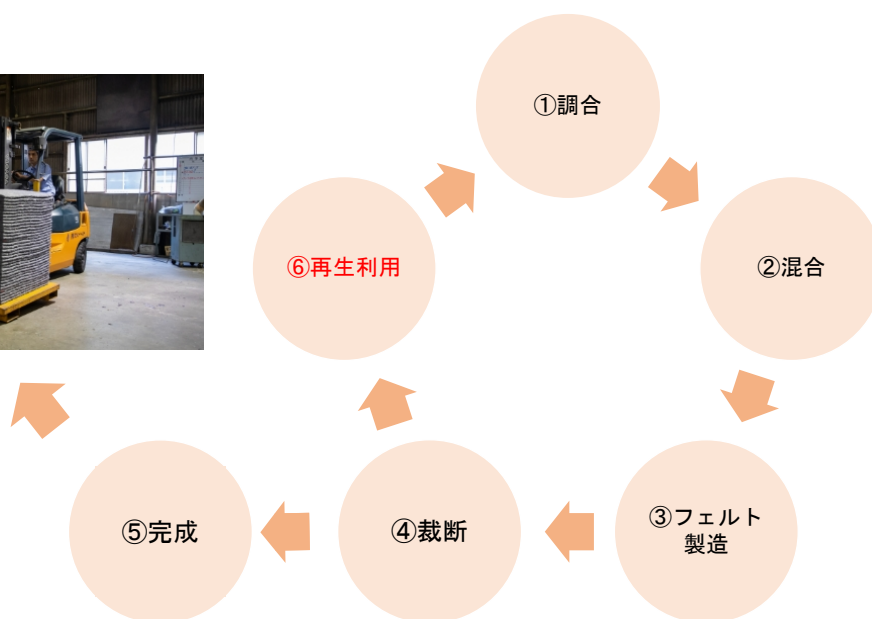
## 【豊田調査に参加して】

自動車産業を中心とした工業が盛んな豊田市において、それに関わる企業を中心に 20 の企業・協同組合にご協力いただき、ヒアリング調査を行いました。本書では、株式会社たいへいについてご報告いたします。



株式会社たいへい（以下、当社）は、1948（昭和 23）年から現在まで、70 年以上にわたり繊維機械の製造・販売を行ってきた企業です。製造している 5 種類の機械をベースに、顧客の使用用途に合わせたカスタマイズをして提供しています。また、繊維機械事業で培ったノウハウを基にフェルト製造事業も展開しており、フェルトは防音・断熱材として主に自動車に使用されています。今回は、当社の繊維機械 5 種類を用いて製造されているフェルトの製造工程を紹介いたします。

## 【製造工程】



初めに、紡績・不織布・衛生綿などの異なる原料を調合します。次に、繊維工業から排出されたくずや古着を、バインダー（接着剤）と共に 100 度近い熱で溶かして混合し、1 つの大きな繊維の集合体を作ります。最後に、調合・混合した原料を熱した後、冷却してフェルトにし、1 つの塊となったフェルトを製品サイズにカットして完成となります。ここで不良品となったものは、一般的な製法では廃棄されてしまいますが、当社ではそれらをもう一度機械にかけて再生・再利用する製法を実現しており、資源を大切にしようとする当社の努力が表われています。

このようにして出来上がったフェルトマットは、主に自動車に使用されますが、それ以外にもベッド用クッション材や一般住宅のアンダーカーペット材、怪我をしたときのサポーターなど、様々な用途に使用できるように当社は挑戦し続けています。

今回の豊田調査会では、今年度初めてのヒアリング調査を行いました。3 年生はヒアリング調査をすること自体が初めてで、先輩方から準備工程を教わりながら、ひとつひとつやり方を覚えていきました。今回の調査を通して、日本経済を支える中小企業の偉大さを肌で実感することができました。

【文責 1 部 26 期 木村拓郎】

## 【豊田調査及び近況のご報告】

森下先生並びに OB・OG、現役生の皆様、平素よりお世話になっております。森下ゼミ 1 部 18 期生、2021 年度大学院修了の中川翔太です。まずは、8 月下旬に森下ゼミ 2022 年度豊田地域調査へと参加させていただき、大変有意義な調査を行うことができました。森下先生をはじめ、準備・運営にご尽力頂いた現役生の皆様には、改めて厚く御礼を申し上げます。

さて、今回は 3 年ぶりの本格的な調査となった豊田調査に関する私見と今年度より愛知県の東海学園大学に就業している私の近況報告の場をいただけましたので、簡単にですがまとめさせていただきます。

まず、調査活動についてでございますが、2019 年末頃からの新型コロナウイルス流行により、森下ゼミにおける宿泊を伴う集団での調査活動というものが、2020 年春の浜松調査中止以降、途絶えていた状況でありました。これは期間としては 1 学年分のゼミ生が本格的な調査経験なく卒業するという事態を招いており、深刻な問題を発生させる状況でありました。具体的には、これまでに脈々と受け継がれてきた調査ノウハウの喪失、調査先の皆様との関係性の断絶といった最悪の事態の発生を危惧しておりました。しかし、今回の豊田調査参加を通じて感じたものとして、ノウハウも人間関係もそう簡単には失われないことを強く確信することができました。

今回の豊田調査は先月の月報内でご報告のあったとおり、従来よりも余裕を持った日程で実施され、1 泊 2 日の中で各班 1 日 1 件ずつ、計 2 件のヒアリング調査、名古屋市内散策と充実した調査日程となりました。おそらく、ほとんどの学生にとって今回が初めての企業調査になっていることから、調査先の皆様のご協力の中で貴重な経験・知見を得られたのではないかと思います。

私は調査当日については、協同組合豊田市鉄工会様、株式会社アイサク様を訪問させていただきました。コロナの影響と今後の展望について伺い、明るい話題を中心にこれまでの外的要因によって空いてしまっていた隙間を埋めるような調査、訪問ができたのではないかと感じました。

続いて、私の近況としましては、2022 年 3 月に明治大学大学院博士後期課程を修了し、4 月より地元愛知県に所在する東海学園大学の経営学部にて助教として勤務しております。諸般の事情により、初年度から 4 年生含め計 40 名を超える 4 学年のゼミ生とともに、日々過ごしている状況です。主な勤務場所は三好キャンパスと呼び、大学最寄り駅が豊田市駅と直通 4 駅と至近距離でございます。約 10 年ぶりの愛知県への移住、豊田市にも今回の調査で約 3 年ぶりに訪問しましたが、豊田市駅周辺の再開発や各種テナントの入れ替

えなど街は自然と変わっていくものだと驚く日々でございます。特に、OB・OGの皆様は春の合宿地であった浜松市含め、豊田市も思い出深い地域なのではないかと思えます。機会がございましたら、かつて調査で訪れた各地を巡るのも一興かと思えます。

幸いにして、社会情勢も日々刻々と変化しており、大学における対面授業の完全再開などかつてのような状況に戻りつつあることを実感しております。また皆様ともOB・OG会で直接見えること待望しております。

最後に、森下先生に改めて御礼を申しあげるとともに、現役生の今後のご活躍を祈念致しまして、私からの調査と近況の報告とさせていただきます。今後ともよろしくお願い申し上げます。

【文責 1部 18期 中川翔太】

【編集長より】

平素より大変お世話になっております。森下ゼミ 25 期の古徳泰誠です。ご報告させていただいた通り、8 月は視察と調査を実施することができ、非常に充実した活動を行うことができました。一方で、初めての宿泊を伴う調査では、先生からご指導をいただくことも多々あり、4 年生として力不足を感じる日々を過ごしました。また、7 月から再開した月報の作成についても、後輩指導や思考を言語化することの難しさを痛感しております。

手探りの状態でのゼミ運営を強いられておりますが、先輩方のノウハウを受け継ぎつつ、私たちの代で一から築き上げるつもりで残りのゼミ活動に取り組む所存でございます。今後ともよろしくお願い申し上げます。

【文責 1 部 25 期 古徳泰誠】